

奄美大島の地域性

大学生が見た島／シマの素顔

須山 聡 編著



海青社

このプレビューでは表示されないページがあります。



7 龍郷町秋名, 茅葺きの高倉 (2006年7月撮影)

8 瀬戸内町嘉鉄, サンゴ垣 (2006年7月撮影)

9 名瀬有良, フクギ防風林 (2006年5月撮影)



このプレビューでは表示されないページがあります。

奄美大島の地域性

大学生が見た島／シマの素顔

目 次

口絵写真.....	i
序 はじめに	11
1. 奄美大島でのフィールドワークの意義.....	11
2. 本書の視点と構成.....	13
第 I 部 シマとナセ	
第 1 章 シマ空間の構造	19
1. シマのコスモロジー.....	19
2. シマッチュのつながり.....	29
3. シマッチュの自然観とケンムン.....	37
第 2 章 中心都市名瀬の発展と再編	47
1. 名瀬の都市的発展.....	47
2. 名瀬の衰退と都市の構造変化.....	55
3. 名瀬再生への取り組み.....	61
4. 名瀬市街地の地域構造.....	67
第 3 章 シマウタの継承と学校の役割	75
1. 学校における継承活動.....	75
2. 継承活動に取り組む人びと.....	81
3. 継承の場としての学校.....	86
4. 継承活動の地域的差異.....	90
第 4 章 食生活の変容	95
1. 都市と村落の地域差.....	95
2. 高齢者の食生活とフードデザート懸念.....	102
3. 油そうめんの拡散と変容.....	110

第Ⅱ部 島のすがた

第5章 シマ的景観要素の諸相	121
1. 高倉の残存と言説.....	121
2. サンゴ垣と防風林.....	129
3. 二棟造り家屋の変容.....	141
4. 「本土式」住宅景観の形成.....	146
第6章 生活行動と生活空間	155
1. 高齢者の生活行動.....	155
2. 子どもの遊び空間の変容.....	164
3. 高校生の日常的余暇活動.....	172
4. 奄美大島へのIターン移動.....	180
第7章 豊年祭の変容	191
1. 現代のノロ祭祀.....	191
2. 祭祀のアトラクション化.....	196
3. 豊年祭とシマ空間の変容.....	201
第8章 カトリックの普及と信仰の混淆	207
1. カトリックの伝来.....	208
2. カトリックの拡散と定着.....	211
3. 信仰の混淆.....	217

第Ⅲ部 ヤマトからの視線

第9章 産業基盤の再生と確立	231
1. 農業の再構築.....	231
2. 本場奄美大島紬業の存続戦略.....	241
3. 黒糖焼酎醸造業と奄美群島の企業経営.....	248

第 10 章 自然を消費する観光の創出——エコツーリズム——	259
1. 奄美大島における観光資源の商品化.....	259
2. ホスト側の取り組み.....	266
3. ゲストの動向とメディア利用.....	271
第 11 章 新たな団体観光——スポーツ合宿——	279
1. スポーツアイランド構想.....	279
2. 合宿団体の入り込み.....	282
3. スポーツ合宿の基盤.....	287
4. 定着の地域的条件.....	296
第 12 章 地域文化の観光資源化——鶏飯の場合——	301
1. 食物と地域.....	301
2. 鶏飯の観光資源化.....	305
3. 鶏飯の観光商品化.....	313
4. 奄美大島と「郷土料理」鶏飯.....	319
結語 奄美大島の地域性	325
文 献.....	331
索 引.....	340
調査報告書『奄美大島の地域性 1～10』総目次.....	345
あとがき.....	349

図 目 次

図0-1	対象地域	9
図1-1	今里における祭祀施設および聖地の分布(2003年)	22
図1-2	大棚における祭祀施設および聖地の分布(2009年)	24
図1-3	シマの空間構造モデル	27
図1-4	奄美大島における共同商店の分布(2011年)	32
図1-5	奄美豪雨災害時における被害発生箇所分布(2010年10月)	34
図1-6	『南島雑話』のケンムン	37
図1-7	笠利町喜瀬におけるケンムン出沒地点の分布	39
図2-1	名瀬市街地中心部(2013年)	48
図2-2	名瀬における主要な店舗の分布(1935年頃)	50
図2-3	名瀬市街地周辺における大型店舗の分布(2010年)	56
図2-4	名瀬市街地中心部の土地利用(2012年)	57
図2-5	名瀬市街地における空家・空店舗・駐車場の分布(2012年)	60
図2-6	名瀬の都市構造モデル(2012年)	69
図3-1	継承活動の実践校の分布(2009年度)	79
図3-2	佐仁太鼓の舞台配置(2010年)	89
図4-1	食料品店から半径500m円の分布(2012年)	103
図4-2	そうめんの移入額の推移(1908～17年)	111
図4-3	奄美大島における油そうめん提供店の分布(2012年)	115
図5-1	秋名における高倉の分布(1965・2006年)	123
図5-2	嘉鉄におけるサンゴ垣の分布(2007年)	130
図5-3	嘉鉄における門の位置と裏門(2007年)	132
図5-4	嘉鉄における地形とサンゴ垣分布の対応(2007年)	133
図5-5	国直におけるフクギの分布(2008年)	135
図5-6	有良における防風林の分布(2006年)	138
図5-7	芦検における新旧家屋の分布(2002年)	146
図5-8	芦検におけるUターン者の帰還年と住宅建築	150
図6-1	名柄における高齢者の集落内行動(2007年)	158
図6-2	大熊における開放・管理・禁止の空間(1940～50年代・2003年)	169
図6-3	名瀬市街地における高校生の余暇空間(2003年)	173

図 6-4	名瀬・笠利の高校生の海浜利用(2003年)	178
図 7-1	大棚のナカドネにおける神役の席次(2009年)	192
図 7-2	西阿室における祭祀施設の配置(2005年)	202
図 8-1	奄美大島におけるカトリック教会の分布(2002年)	207
図 8-2	奄美大島における初期のカトリック布教過程(1892～1906年)	209
図 8-3	大笠利教会におけるカトリック信徒の年齢構成(1998年)	213
図 8-4	大笠利におけるある信徒一族の家系図	214
図 8-5	芦花部における出生・受洗年代別信徒数	215
図 8-6	芦花部における信徒の分布(2008年)	216
図 8-7	芦花部におけるカトリック墓の形式(2008年)	222
図 9-1	〈やさい市場〉のインターネットによるたんかんの注文件数 (2004～05年)	233
図 9-2	節田における農業的土地利用(2006年)	234
図 9-3	島バナナの月別平均取扱量と平均価格(2003～07年)	237
図 9-4	小宿里における島バナナ畑の分布(2009年)	238
図 9-5	本場奄美大島紬の生産反数の推移	241
図 9-6	奄美大島における黒糖焼酎メーカーの分布(2008年)	249
図 10-1	奄美大島における観光資源の分布(2011年)	262
図 11-1	奄美大島におけるスポーツ合宿団体数の推移(1994～2007年度)	282
図 11-2	奄美大島におけるスポーツ合宿団体の入り込み (2007年11月～2008年4月)	284
図 11-3	奄美大島でスポーツ合宿を行った団体の所在地 (2007年4月～2008年4月)	286
図 11-4	スポーツ合宿団体を受け入れた宿泊施設の分布 (2007年4月～2008年4月)	288
図 11-5	〈亜熱帯ホテル〉における月別入込客数(2001年度)	290
図 11-6	奄美大島における競技施設とロードコース(2009年)	292
図 12-1	奄美大島における鶏飯店の分布(2010年)	310
図 12-2	奄美大島における鶏飯店の開業および鶏飯の採用	311
図 12-3	鶏飯の地域的な意味	319

表目次

表1-1	奄美大島における共同商店が有する諸機能(2011年)	33
表1-2	笠利町喜瀬におけるケンムン遭遇事例(2012年)	38
表2-1	名瀬における区画整理と埋立事業	52
表3-1	奄美大島の小中学校におけるシマの芸能の継承活動(2009年度)	77
表3-2	シマの芸能の継承活動の地域的差異(2009年度)	92
表4-1	名瀬と名柄における年中行事と料理(2003年)	96
表5-1	秋名に現存する高倉の主要寸法(2006年)	124
表5-2	高倉をめぐる主な言説(2006年)	126
表6-1	名柄における高齢者の行動(2007年6月25～29日)	156
表6-2	名柄における高齢者の外出行動に基づく類型(2007年6・7月)	161
表6-3	奄美大島におけるIターン者の事例(2012年)	181
表6-4	Iターン者の居住地変化	185
表7-1	大棚で現在とりおこなわれている祭祀(2009年)	195
表7-2	豊年祭とシマの空間構造の関係(2005年)	204
表8-1	笠利小教区における教会別信者数(2001年)	212
表8-2	芦花部におけるカトリック信徒の墓と被葬者(2008年)	223
表8-3	芦花部におけるカトリック信徒宅の祭壇と仏壇(2008年)	224
表9-1	奄美群島における機屋および織工の分布(1978・2001年)	242
表9-2	奄美大島における黒糖焼酎メーカー(2008年)	251
表9-3	マルエーグループのグループ企業(2008年)	253
表10-1	奄美大島における体験型観光業者(2011年)	264
表10-2	「るるぶ」における奄美大島の掲載内容	275
表12-1	奄美大島における鶏飯店(2010年)	308

写真 目 次

写真 1-1	今里のトネヤ.....	23
写真 1-2	大棚のカミミチ.....	25
写真 1-3	大棚, 毛陣のキッキョ.....	26
写真 1-4	喜瀬, 宮田グスクのノロ墓.....	40
写真 2-1	永田橋市場(1964年頃).....	54
写真 2-2	名瀬石橋町, 機屋のアパート.....	71
写真 3-1	三味線とチヂン.....	83
写真 3-2	手花部小, 八月踊りの練習.....	85
写真 3-3	教材化されたシマウタ.....	85
写真 4-1	油そうめん.....	110
写真 5-1	宇検村名柄, 下部を畳敷きに改造した高倉.....	125
写真 5-2	嘉鉄, ミナトのグスクダと裏門.....	133
写真 7-1	大棚, ナカドネの神棚.....	193
写真 7-2	大棚, 豊年祭の相撲.....	197
写真 8-1	名瀬末広町, カトリック布教発祥地の記念碑.....	208
写真 8-2	芦花部教会の洗礼名簿.....	215
写真 8-3	芦花部教会の内部.....	218
写真 8-4	カトリック信徒宅の仏壇.....	225
写真 9-1	小宿里, 島バナナの庭先栽培.....	239
写真 10-1	〈さんご〉のチラシ広告.....	273
写真 11-1	マリオ氏に贈られた選手らの寄せ書き.....	295
写真 12-1	鶏飯丼.....	315
写真 12-2	インスタント鶏飯.....	317



図 0-1 対象地域

このプレビューでは表示されないページがあります。

序 はじめに

1. 奄美大島でのフィールドワークの意義

編著者が勤務する駒澤大学地理学科地域文化研究専攻では、3年生を対象とする選択必修科目「地域文化調査法」および「地域文化演習」を開設している。これらの授業科目は、地域調査の実践的な方法を修得することを趣旨としている。地域文化研究専攻に所属する7人の教員は、それぞれ対象地域とテーマを決めてこの授業を担当している。地域調査の実習は、大学における地理学の専門教育のなかで、医学部の解剖実習や教員養成課程の教育実習と同様の地位を占める。地理学を学ぶ本学科の学生は、いずれかの科目を最低1科目履修し、フィールドワークのスキルを身につけなければならない。

人文地理学の地域調査では、特別の装置や分析機器を使うことは稀である。地形図の読み方、景観の観察法、土地利用調査、聞き取り調査、その場所ではか得られない文献の見つけ方……。これらの手法のひとつひとつは取るに足らないものかもしれないが、これらを組み合わせて駆使することで、地域調査は成り立つ。こういった些細なスキルを、教場での座学で教員が語ることはほとんどなく、また語ったとしても「畳の上の水練」のごとく、学生たちにとってはリアリティに欠ける。フィールドワークのスキルは、野外での実習によって学生らが自ら獲得するものである。

編著者も地理学科の教員としてこれらの科目を担当してきた。2002年度からは奄美大島を対象地域とし、学生らとともに地域調査を継続し、2012年度までに調査報告書を10号、9冊刊行してきた(巻末pp. 345-348参照)。本書はこれらの調査報告書を母体に編まれた奄美大島の地誌である。

フィールドワークの初心者にとって、奄美大島は好適な地域である。第1に亜熱帯の自然環境と奄美群島独自の歴史的・文化的背景が、学生たちに深い感

このプレビューでは表示されないページがあります。

第1章 シマ空間の構造

奄美大島における生活の基本単位は「シマ」である。シマは集落の空間的広がり、内部での社会的な結びつきを同時に指す言葉である。ほんの60年ほど前まで、人びとの日常生活行動はシマの内部で完結し、生まれたシマの外は異世界と認識された。奄美大島における地域差や地域の特徴を把握するための単位地域として、それぞれのシマの特徴とその多様性を理解することは、とりもなおさず奄美大島を知る第一歩である。本章ではシマの基本的な空間構造を提示した後、シマ住民の社会的結びつきの強さを近年の事例から明らかにする。さらに奄美群島の妖怪、ケンムンを通じて、シマの人びとの自然観を考察する。

1. シマのコスモロジー

(1) 自己完結的な小宇宙、シマ

奄美大島はほぼ全島が山地に占められ、人間が居住する集落、すなわちシマの多くは、小河川による開析や離水によって形成された狭小な海岸平野に立地する。それぞれのシマは周囲を山地に囲まれているため、近隣のシマとの通行が困難であった。また、シマは海岸平野とそれに接続する山地斜面を農地とし、正面に広がるサンゴ礁と海とをこれらに組み合わせて自給的な生業基盤を構築していた。したがってシマは周囲から隔絶された孤立的な小宇宙とでも言うべき世界であり、自己完結的で秩序だった空間構造、すなわちコスモロジーを有していた。

本節では大和村今里と大^{おおだな}棚を事例に¹⁾、シマに立地する祭祀施設や聖地の分布から、シマの空間構造の理念的なモデルを導き出す。シマのマイクロコスモスは、奄美大島全域についてある程度共通すると考えられ、奄美大島を地域的・空間的に考察する際の基本的視座を提供する。すなわち、奄美大島には類似し

このプレビューでは表示されないページがあります。

第2章 中心都市名瀬の発展と再編

沖縄島的那覇をはじめ、石垣、宮古、そして名瀬には高次の中枢管理機能が集積する(口絵写真4)。離島における都市的集積に関して、地理学をはじめとする学問分野の関心は稀薄であった¹⁾。このことは、地理学の離島研究においては文化地理学・歴史地理学的関心が高く、都市地理学の蓄積が少ないことを如実に物語る。事実、都市としての名瀬の研究は多くはなく、唯一のまとまった研究としては、『名瀬市誌』があるのみである。名瀬を本土の地方都市と同列に並べた場合、その特徴はどのような点に求められるのだろうか。本章では都市としての名瀬の発展や変化を、都市地理学的視点で分析・考察する。

1. 名瀬の都市的発展

(1) 名瀬の都市形成

奄美群島を取り巻く政治・経済環境は、ここ30年間悪化の一途をたどってきた。特に国家財政の悪化にともなう奄美群島への補助金削減と、それにとりまなう公共事業の減少、および基幹産業であった大島紬業の衰退は、群島の中核都市である名瀬にも大きな打撃を与えた。これらは奄美群島特有の地域的問題であるが、その一方で、モータリゼーションや郊外の形成・発達、それらにとりまなう市街地中心部の衰退、さらには市街地の再開発と活性化、といった日本の地方都市に普遍的な現象を名瀬に見ることができる。

本章では、シマと対置される空間としてのナセを対象とし、その事例としての奄美市名瀬をとりあげる。都市地理学の一般的な手法に則って都市としての名瀬を分析し、離島都市としての名瀬の特徴を導き出す(図2-1)。都市は歴史的蓄積の上に形成されるが、既存の都市構造が、実際の都市機能に適合しない場合、交通の渋滞やインナーシティ化などの都市問題が発生する。このような都市問題とその解決策としての再開発についても考察したい。

このプレビューでは表示されないページがあります。

第3章 シマウタの継承と学校の役割

シマで話される言葉「シマグチ」はシマごとに大きく異なる。また、豊年祭をはじめとする行事で歌われるシマウタや踊りもまた、シマごとに独自性を有する。シマ独自の歌謡・演奏・舞踊・演劇などを、本書では総じて「シマの芸能」と呼ぶ。シマの芸能はそれぞれが独自の価値を有するが、芸能の伝承が困難なシマが増加しつつある。地域固有の芸能は、一般的に無形文化財として保護・保存の対象とみなされる。しかし、奄美群島のシマの芸能は、現在もなお姿を変え新たなものを生み出しつつある。元ちとせや中孝介など奄美大島出身のアーティストは、いずれもシマの芸能を基盤としている。シマの芸能を保護・保存の対象とのみみなすことは、シマの芸能が依然として有する活力を過小評価することにつながる。本書はシマの芸能を、現在も生成発展するダイナミズムを内包するものとする。

1. 学校における継承活動

(1) シマの芸能

シマの芸能については、音楽学・言語学・民俗学などの分野で研究が蓄積されてきた。小川(1979・1989・1999)はシマウタを採集・分類し、歌詞内容の類型を分析した。中原(1997)は、文化人類学の観点からシマウタの意味づけを考察した。また高橋(2006)は、琉球の芸能であるエイサーと奄美大島の八月踊りの差異について論じている。奄美群島におけるシマウタを採集した歌詞集や、一般向け書籍の出版も盛んである(南日本新聞社 2003)。民俗学では、祭祀・儀礼をシマの生活を構成する一断面として位置づけ、そのなかでシマの芸能を記載する(下野 2005)。これらの研究はすべてシマを舞台とし、シマの芸能がシマのなかですべて自己完結することを暗黙の前提としている。しかし、その前提となるべきシマは、高齢化や過疎化によって萎縮し、シマ内部における芸能の伝

このプレビューでは表示されないページがあります。

第4章 食生活の変容

過去60年で奄美大島の食生活は大きく変容した。ファーストフードやインスタント食品は本土と同様に普及し、食生活には奄美大島の独自性がもはや見られないようにさえ思える。しかし、食事や食べ物は地域の諸条件をきわめて濃厚に反映する。奄美大島の食事を観察することで、奄美大島の独自性ばかりではなく、島内における地域的差異を見いだすこともできよう。本章では、食事内容の地域的差異を観察するとともに、高齢者の買物行動と食生活からフードデザートの危険性を検討し、奄美群島でよく食べられる油そうめんの商品化を考察する。

1. 都市と村落の地域差

(1) ハレの食事

本節では名瀬市街地と宇検村名柄^{な がら}を対象に(図0-1)、食事の地域的差異を都市一村落間の差異として検討する。奄美群島の食事に関する研究は、伝統的な食事の記録と復元に重点が置かれてきた¹⁾。本節では、現在の食事を忠実に捉えることを趣旨とし、ハレとケの食事を分析する。そのために名瀬市街地の18世帯、名柄の5世帯から、ハレの料理に関する詳細な聞き取り調査を2003年7月に実施した²⁾。

奄美大島における主要な年中行事は、一般に正月行事・三月行事・八月行事・年末行事に分けられる(表4-1)。正月行事には正月に続き、七日節句・鏡開き・旧正月・小正月と続く。生まれ年の干支に当たる者がいる場合には年の祝いを行う。三月行事には潮干狩りが行われる。八月行事はアラセチ・シバサシ・ドンガの八月三節(ミハチガツ)と、旧暦15日の豊年祭からなる。これらの行事は旧暦でなされるが、他に新暦にしたがう年中行事が加わる。3月3日や5月5日は旧暦・新暦どちらでも祝われる。また、シマによって行事には大きな地

このプレビューでは表示されないページがあります。

第5章 シマ的景観要素の諸相

第1章で明らかなように、奄美大島に分布するシマは、それぞれが自己完結的な小宇宙であり、独自の構造を有する。シマを1つの構造体とみなし、その全体像を見いだすアプローチは、風景画の構図や全体的な色彩の配置を鑑賞する態度に類似する。しかし、描きこまれた建物や、農地や、人びとの仕草を、目を凝らして見つめるのも、これまた絵画の鑑賞態度である。シマを観察する時、特定の景観構成要素に着目する手法は、地理学が得意とする分析法の1つである¹⁾。本章では奄美大島のシマに特徴的な景観構成要素を「シマ的景観要素」と名づけ、それらがシマの何を映し出し、またどのように変容したのかを考察する。シマ的景観要素にはさまざまなものを想定することができるが、ここでは高倉、サンゴ垣と防風林、二棟造り家屋、および新たなイノベーションである「本土式」住宅を取り上げる。

1. 高倉の残存と言説

(1) 米どころ秋名の減反政策

龍郷町秋名は龍郷町の西部に位置し(図0-1)、秋名川の比較的大規模な沖積平野の河口部に立地する、奄美大島有数の稲作地域であった²⁾。また、秋名は大島紬の主要な生産地域で、独自の柄である秋名バラの産地として知られる。高倉は稲の貯蔵施設で、4～9本の柱で支持された高床式の建物である。高倉の特徴は茅葺きの大きな寄せ棟屋根のクラ部分が、太いイジュの木柱に支えられ、高さ2mを超える床下空間があることである。そのため、高倉は重心が高く、見た目には不安定な印象を与える。

奄美大島の農業はサトウキビ栽培に特化したため、米の生産は減少傾向にあった。1970年に全国一律10%の減反が実施され、秋名でも米の生産調整を余儀なくされた。減反実施直後の1970年6月において、龍郷町では調整指示

このプレビューでは表示されないページがあります。

第6章 生活行動と生活空間

奄美大島の地域性は、この島に暮らす人びとの生活行動にも反映される。最大都市である名瀬での生活には、本土の地方都市と共通する要素が見られるであろうし、隔絶的なシマの暮らしには、自己完結的で独自の生活空間が構築されているであろう。本章では、奄美大島に暮らす人びとを年齢で区分し、高齢者・子ども・高校生の生活空間を考察する。また、新たに奄美大島の住民となったIターン者についても、その移動の軌跡と島での生活を考察する。なお、子どもや高校生の記述には、この年齢層特有の逸脱的行動も含まれるが、これは本土大都市圏をはじめとしていずれの地域でも観察しうる現象であり、それを率直に記載した結果であることを前もってお断りしたい。

1. 高齢者の生活行動

一般に高齢者の外出行動は、加齢にともない制約され、空間的範囲・頻度ともに縮小・低下する。公共交通機関が充実していない奄美大島の非都市地域では、高齢者の外出行動には、大きな制約があることが予想される。高齢者の生活行動の実態を明らかにすることは、高齢者のQOLを改善する第一歩である。

(1) 集落内の生活空間

宇検村^{ながら}名柄に暮らす高齢者を対象に(図0-1)、生活行動に関する聞き取り調査を実施し、表6-1を作成した。同表には、65歳以上の高齢者32人を対象に、2007年6月25日(月)～29日(金)において、主要な目的地への移動が、調査期間中に1回以上ある場合を記載した。同表では名柄商店と畑への来訪については移動手段を¹⁾、また公民館への来訪については来訪目的を示した。公民館への来訪目的には、いきいきサロン²⁾、老人会への参加がある³⁾。さらに友人・親戚宅への来訪では、訪問者との関係を示した。

このプレビューでは表示されないページがあります。

第7章 豊年祭の変容

奄美大島のシマは自己完結的なマイクロコスモスを形成している(第1章参照)。このマイクロコスモスを形作る原理は、琉球文化圏に広く見られるノロ信仰に基づく。シマはいわば『祭儀の空間』である(池 1979)。祭儀の空間の統括者はノロであり、シマの祭祀はノロ組織によって執り行われた。奄美大島ではノロ組織の長(オヤノロ、オオノロ)が引退し、オーセンティックなノロ祭祀を継続しているシマはない。祖霊やニライカナイに対する信仰が稀薄化し、儀礼の継承者が不在となったシマで、儀礼はいかに存続するのであろうか。本章ではノロ信仰に基づくシマの行事として豊年祭を取り上げ、現代の豊年祭におけるさまざまな意味の変容を、「アトラクション化」と「空間」をキーワードに考察する¹⁾。

1. 現代のノロ祭祀

(1) ノロ組織

大和村今里で執り行われるノロ行事は(図0-1)、旧暦2月のみずのえ壬からみずのと癸に行われるオムケ、旧暦4月の壬から癸に行われるオーホリ²⁾、8月の豊年祭の3回である(2003年7月調査当時)。祭祀を行うノロ集団は、親ノロ、ワーワキ、シャーワキ、ミキガミ、グジヌシからなる³⁾。グジヌシ以外は女性である。親ノロは1人で、ノロ祭祀の主役をつとめる。ワーワキ、シャーワキはカミグチを唱える時にノロの両脇に侍る神役である。ワーワキには上脇、シャーワキには下脇の字が当てられる。ミキガミは各ヒキの特定の家系から出され、ヒキの安全を願う。グジヌシは唯一男性の神役で、トネヤを守る。

大和村おおだな大棚のノロの組織は、親ノロ、ワーワキ、シャーワキ、やまほう山方、うみほう海方、グジヌシからなる。組織の構成は今里と共通するが、ミキガミはおらず、山方・海方という役がある点は異なる。親ノロ、ワーワキ、シャーワキは役場の三役

このプレビューでは表示されないページがあります。

第8章 カトリックの普及と信仰の混淆

奄美大島にはカトリック信徒が多く分布する。喜界島と加計呂麻島を含む奄美大島は、8つの小教区に分割され、32の教会が設置されている(図8-1)。ことに奄美市笠利町、龍郷町、および奄美市名瀬では、教会が濃厚に分布する。奄美大島にカトリックが伝来したのは、長崎や五島列島とは異なり明治半ばであった。カトリック教会や墓地は、シマの景観にアクセントを与えると同時に、信仰に基づく信徒の行動は、シマの地域社会のあり方に影響を与えていることが予想できる¹⁾。また、在来の信仰とカトリックがいかなる関係を取り結んでいるかにも関心が集まる。本章では奄美大島におけるカトリックの普及と、信仰のあり方を考察する。

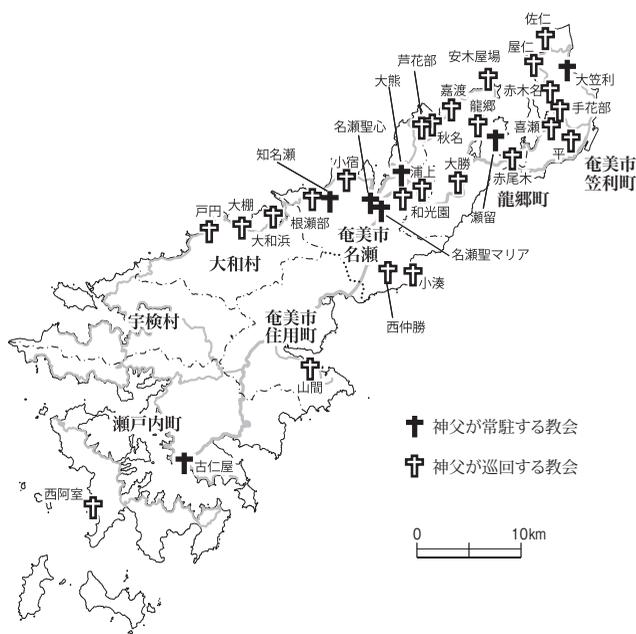


図8-1 奄美大島におけるカトリック教会の分布(2002年)
(現地調査により作成)

このプレビューでは表示されないページがあります。

第9章 産業基盤の再生と確立

奄美大島の経済を長らく牽引してきたサトウキビや大島紬といった既存産業は、需要の減退や国際競争により、生産環境が大きく変化している。大島紬の生産縮小には歯止めがかからず、農業の基幹部門であるサトウキビは、TPP加入によって壊滅的な打撃をこうむることが危惧されている。一方では奄美大島産の亜熱帯性果樹が本土で高い評価を受けたり、黒糖焼酎が最近ではコンビニエンスストアでも売られるようになってきた。奄美大島の農業や製造業に、再生の可能性はないのだろうか。本章では地域の特徴を生かした新たな産業基盤の構築を、第一次・第二次産業部門について考察する。

1. 農業の再構築

(1) たんかん

奄美群島では温暖多雨の気候を利用したさまざまな亜熱帯性果樹が栽培されている¹⁾。名瀬の年平均気温は約21℃で、夏日の日数は183日に達する。一方、毎年平均27個発生する台風のうち、平年で約4個が奄美群島に接近する。台風にもなう暴風雨により、樹木の倒伏、果実の落下、葉の損傷や塩害などの被害が発生する。2000年における奄美群島の農業粗生産額の構成では、野菜・サトウキビ・花卉が全体の75%以上を占め、果樹の比率は3.9%にすぎない。

たんかんはオレンジとポンカンとの自然交配種である。原産地は中国広東省で、台湾を經由して日本に導入された。たんかんの糖度上昇には寒暖差が必要であるため、標高250～300mの内陸平坦面が栽培の適地とされている。奄美大島では、1977年からたんかんが生産されている。

奄美市名瀬浦上の平山氏(仮名、以下本節の個人・企業名は同様)は、3.1haの耕地のうち、2.7haでたんかんを栽培する先駆的農家である²⁾。同氏のたんかん園は奄美市と龍郷町の境界付近に広がる、高位平坦面の南向き斜面に造成

このプレビューでは表示されないページがあります。

第10章 自然を消費する観光の創出

— エコツーリズム —

奄美大島は観光地としては後発で、入込客数は年間35～40万人台で推移している。観光業の不振の原因には、本土大都市圏からの直行航空路が貧弱であることや、収容力が大きい宿泊施設が少ないことがあげられる。しかし反面、奄美大島は他の観光地が経験したマスツーリズムの洗礼を通過することなく、独自の観光スタイルを構築しつつある。それが本章で取り上げるエコツーリズムである。エコツーリズムは、地域の自然資源を基盤とした小規模・長期滞在・地域定着型のツーリズムである。空間に限界がある離島では、大規模なマスツーリズムよりも、少人数のゲストの満足度が高い、ダイビングやサーフィンなどの身体的経験を重視したツーリズムが適している。

1. 奄美大島における観光資源の商品化

(1) 「商品化」とは

日本の観光は、あらかじめプランされたアトラクションを団体でめぐり、周遊観光を中心とするマスツーリズムが長らく主体であった。マスツーリズムはとくに1960年代の高度経済成長期において発達し、各地に地域の自然や文化を観光商品化した観光施設が作られた。しかしこのような施設は地域住民との交流をもたず、地域の文脈から遊離していた。また、観光施設の造成・建築は、自然環境の破壊をはじめとする回復不能の影響を地域に与えた。

強度に商品化された観光施設の建設のために、観光の本質的な経営資源である地域資源を失っては、観光地域の寿命はきわめて短い。地域資源を持続的に利用することは、観光業を永続させるために不可欠な戦略である。地域資源を持続的に利用し、安定的な観光地域を形成するためには、自然環境や住民に対する負荷が小さい観光スタイルを作る必要がある。そのためには地域の資源を過剰に加工せず、ありのままの姿をゲストに提供すべきであるという考えがあ

このプレビューでは表示されないページがあります。

第11章 新たな団体観光

— スポーツ合宿 —

奄美大島にはアテネオリンピック金メダリストの野口みずきや、シドニーオリンピック銀メダリストのエリック・ワイナイナをはじめ、多くのアスリートやチームが合宿に訪れる(口絵写真23)。奄美大島でのスポーツ合宿は1990年代に始まったが、一過性ものにとどまらず、10数年を経過して地域に定着した観がある。冬の奄美大島では、すらりとした手足の選手らが一般道路を走る姿が、もはや見慣れた風景となっている。

陸上競技をはじめとするスポーツには、競技場などの施設が不可欠であるが、施設さえ整備されれば競技や練習ができるわけではない。奄美大島には、陸上競技をはじめとするスポーツ合宿に適した条件があると考えられる¹⁾。本章では、スポーツ合宿が奄美大島に定着する地域的な諸条件を解明する。

1. スポーツアイランド構想

(1) 構想の背景

日本における観光行動は団体旅行を基本としていた。ホスト側にとっては、まとまった入込客を確保できる団体観光は効率がよかった。そのため高度経済成長期には、大量の収容能力を有する大型宿泊施設が、温泉地など全国の観光地に簇生した。しかし、1980年代以降は観光行動が個人や少人数のグループ主体に移行した。さらに1990年代以降はグリーンツーリズムやエコツーリズムといった新たな観光のスタイルが確立し、細分化され多様化した需要に応えることが、ホスト側には求められた。

このような動向下で、スポーツ合宿は団体観光という意味では旧来の観光スタイルを踏襲する。しかしスポーツ合宿は、バスで団体が移動する周遊型観光ではなく、1か所にとどまる滞在型観光である。また滞在期間が長期間に及ぶ点も従来の団体観光とは異なる。スポーツ合宿で必要とされる資源は、第一に

このプレビューでは表示されないページがあります。

第12章 地域文化の観光資源化

— 鶏飯の場合 —

食物・食料は人間の生命と健康を維持するために必要不可欠であり、同時に経済的な取引の対象でもある。しかしそれらにとどまらず、食物は人間の文化的産物としての側面を有し、それは儀礼や日常の料理として表出する。さらに農林水産物およびそれらの加工品として食物をみた場合、食物のあり方はそれらが作り出される地域の生業・産業と、その基盤である自然環境や歴史的背景と密接に関わり合う。すなわち、食物を地域的に分析することは、その地域の性格を理解することにつながる。

1. 食物と地域

(1) 地理学の考え

地理学分野では第一次産業を対象とする農業地理学や水産地理学の分野において、食物原料となる農水産物の地理的特性が研究されてきた。しかし文化的所産としての食品や料理に関する研究は、照葉樹林文化論に代表されるさまざまな農耕文化論に見られるように、隣接諸分野において先行した(中尾 1966)。中尾(1972: 3)は「種から胃袋まで」という表現で、食料の生産から消費にいたる全過程を網羅した学問体系の構築を提案した。これは農学のみならず、経済学などの隣接分野においても近年議論されている、フードシステム論の原形的な発想であろう。地理学においては荒木(2002)や高柳(2006)といったフードシステム研究の成果が蓄積されつつある。しかし現在のフードシステムの地理学では、分析対象が生産・加工の段階を中心とし、消費すなわち食事や料理への関心は薄い。また、生産・流通・消費を一連のプロセスとする標準的な分析手法がまだ定着していないことも問題である。生産機能ばかりを重視した経済地理学への批判は、ここ20年間わだかまっているにもかかわらず、消費の地域的・空間的分析の枠組みはまだまだ確立しているとはいえない。

このプレビューでは表示されないページがあります。

結語 奄美大島の地域性

結びとして、本書の目的である奄美大島の地域性の抽出を試みよう。

第Ⅰ部「シマとナセ」から明らかとなったことを端的に要約すれば、シマの自己完結性とナセの開放性である。小宇宙としてのシマは、形を変えながらも現在もあり続け、シマの人びとの生活に粹組みを与えている。一方、ナセには島内にとどまらず群島全域からの人口流が集中し、高度経済成長期において極大化した。シマとナセは本質的に異なる空間であり、これらが併存していることが、奄美大島を強く特徴づける。

シマではノロ祭祀がなくなり、豊年祭の場はミャーから公民館に移ったが、シマ独自のコスモロジーは、おおむね現在も輪郭をとどめている。そのなかで形成される住民の結びつきは、共同商店の運営や水害時の行動にも顕在化する。共同商店はコミュニケーション維持の機能を具備し、相互扶助の拠点として機能する。またシマの共同体的つながりは、2010年の奄美豪雨災害時に有効に機能した。住民の結びつきは、日常的な近所づきあいに加えて豊年祭などの行事を通じて醸成される。また、高齢者の体調や持病などの情報は、住民間で日常的に共有される。こうして作り上げられた人的な結びつきが、激甚な災害に対して有効に機能した。一方、シマを取り囲む奄美大島の自然環境は、ケンムンによって表象される。ケンムンの出没点は人間の居住域の境界部に当たる。ケンムン言説がなお流布するのは、住民が自然環境に対する畏怖の念を持ち、聖地やシマの境界を今もなお強く認識していることを反映する。

名瀬は、群島全域からの人口流入により急速に成長した。名瀬とその周辺では不足する住宅用地が、埋立と土地区画整理によって確保された。しかし、1990年代以降は中心商店街が衰退し、空店舗と駐車場が土地利用の多くを占め、市街地の空洞化が著しく進展した。名瀬の再生のため、市街地再開発が施工中であり、活性化のためのさまざまな試みもなされている。離島都市として

このプレビューでは表示されないページがあります。

文 献

- 麻生 将 2011. 1930年代奄美大島におけるカトリックをめぐる排撃と「排除の景観」の形成. 人文地理 63: 22-41.
- 麻生 将 2012. 近代日本のキリスト教をめぐる言説空間の形成と展開に関する試論—昭和戦前期の新聞記事をテキストとして—. 歴史地理学 54(3): 20-35.
- 奄美宣教100周年記念誌編集部編 1992. 『カトリック奄美100年』聖母の騎士社.
- 荒木一視 2002. 『フードシステムの地理学的研究』大明堂.
- 安斎 伸 1984. 『南島におけるキリスト教の受容』第一書房.
- 生田久美子 1987. 『「わざ」から知る』東京大学出版会.
- 井口 梓・小島大輔・中村裕子・星 政臣・金 玉美・渡邊敬逸・田林 明・トム ワルデチュク 2006. 九十九里浜における観光の地域的特性—白子町中里地区のテニス民宿を事例に—. 地域研究年報 28: 127-166.
- 井口 梓 2012. 「田舎暮らし」の特徴とその変遷. 日本地理学会発表要旨集 2012a: 302.
- 池 浩三 1979. 『祭儀の空間—その民俗現象の諸相と原型—』相模書房.
- 石川尚子編 1999. 『全集日本の食文化 第12巻—郷土の行事と食—』雄山閣出版.
- 石川寛子 1999. 『地域と食文化』放送大学教育振興会.
- 石川雄一 2010. 石垣島におけるIターンの動向と中高年Iターン者の旧集落への移住. 平岡昭利編著『離島研究 IV』83-92. 海青社.
- 石毛直道 1995. 『食の文化地理—舌のフィールドワーク—』朝日新聞社.
- 石原清光 2006. 『奄美与路島の「住まい」と「空間」』第一書房.
- 石原昌家 1980. 擬似共同体社会としての郷友会組織. 沖縄国際大学文学部紀要(社会科学篇) 8(1): 47-53.
- 稲垣真美 1985. 『現代焼酎考』岩波書店.
- 今村規子 2010. 『名越佐源太の見た幕末奄美の食と菓子』南方新社.
- 岩多雅朗 2012. 絵図で読み解く名瀬の歴史. 弓削政己・岩多雅朗・飯田 卓・中山清美 編著『名瀬のまち いまむかし—絵地図から地籍図まで—』南方新社. 71-108.
- 岩間信之 2011. 『フードデザート問題—無縁社会が生む「食の砂漠」—』農林統計協会.
- 上野和彦 1987. 『地場産業の展望』大明堂.
- 宇検村・伊仙町・奄美市 2011. 『宇検村・伊仙町・奄美市による歴史文化基本構想』.
- 漆原和子 2007. 『風土が作る文化—屋敷囲いとしての石垣—』法政大学国際日本学研

このプレビューでは表示されないページがあります。

索引

略語

QOL(生活の質)／33, 108, 155, 164, 327
 TPP(環太平洋戦略的経済連携協定)／231

あ行

Iターン者／15, 180, 186, 266, 269, 277, 327
 アオサ／107
 空店舗／60, 325
 秋名バラ／121
 空家／60
 アクター／260, 270
 アクマキ／97, 98
 アコウ／129
 アザマゴ／49
 アシャゲ／20, 21, 23, 27, 201, 203
 小豆粥／100
 遊び／164
 遊び空間／167, 327
 中孝介／75
 アダン／137
 誂え物／243
 アトラクション／259, 263, 277, 303, 328
 アナーキースペース／164
 亜熱帯果樹農業／16, 231, 328
 亜熱帯農業／15
 油そうめん／14, 95, 110, 112, 114, 304
 アマコン／64
 奄美遺産／129
 あまみエフエムディ！ウェイヴ放送／64
 奄美豪雨災害(2010年10月)／14, 34, 325
 奄美市役所／70
 奄美振興開発事業(奄振)／48, 68, 101, 269
 奄美スポーツアイランド協会／281, 293, 297
 アマミノクロウサギ／261
 『奄美のケンモン』／46
 アメリカ軍政／111, 116, 249, 261, 321
 アラセチ／95
 有村治峯／253
 泡盛／249, 328

威光模倣／94
 居酒屋／115
 居酒屋型／306
 イザリ／270
 イジュ／121, 142
 イジュン／26, 27
 一般食堂型／307
 田舎暮らし／180, 260
 インスタント食品／95, 101, 103, 109
 インスタント鶏飯／317, → 鶏飯
 インターネット／232
 ウェンフネ／96, 304, → 豚骨
 上本町通り／50
 内側性／163, 327
 ウチナー／321
 打ち麵／114
 ウマレノガン／195
 海方／191
 埋立造成事業／51
 駅伝／283, 297
 エコツアーガイド／268
 エコツーリズム／259, 277, 279, 302
 恵原義盛／46
 エリック・ワイナイナ／279
 老いの風景／108
 大島高等女学校／211
 大島支庁／59, 70
 大島商社／49, 50
 大島大支庁／67
 大島紬／15, 16, 54, 165, 231, 241, 254, 261, 266, 328
 大島紬業／70
 オーセンティシティ／313
 オーホリ／191, 194
 小笠原種／236
 「男はつらいよ」／263
 オムケ／191, 194

このプレビューでは表示されないページがあります。

調査報告書『奄美大島の地域性1～10』総目次

※カッコ内に執筆者名、および末尾に掲載章・節を示した。

第1号(2002年度)

- 奄美大島におけるカトリックの拡散と定着——大笠利集落を事例として——(石口博章・石橋 憲)第8章1・2節
- 龍郷町秋名における伝統的祭礼の存続要因(安田大輔・矢引将人)第5章1節
- 奄美大島における海浜利用の地域性(北島敦司・向井直樹)第2章2節
- 宇検村芦検集落における住民の空間意識(中川 聡)第5章4節
- 人口移動によって特徴づけられる住宅景観——芦検集落を事例として——(齋藤譲司)第5章4節
- 奄美群島における黒糖焼酎生産の新展開——奄美大島を中心に——(松岡美根子)第9章3節

第2号(2003年度)

- 大和村今里の集落景観(浅尾知子・高橋史子・古川麻理子・渡辺朋恵)第1章1・2節, 第5章3節, 第7章1節
- 名瀬市大熊における子供の遊び空間の変容——大人と子供の相互関係——(遠藤孝司・高桑晴彦・高橋綱太・道元良太)第6章2節
- 奄美大島における食生活の変容——名瀬と名柄の事例——(鶴澤彩子・小杉こずえ・矢澤まどか)第4章1節
- 奄美大島における高校生の余暇行動——名瀬市と笠利町の事例——(奥山英里子・辻智子・若尾 園)第6章3節
- 奄美大島におけるスポーツ合宿の定着とその要因(波田野壮太・小野雄祐・鈴木健太・高柳義人)第11章
- 大島紬織物業における新たな動向——機屋・織工・泥染業者——(黒澤奈緒美・星野愛伊羅)第9章2節

第3・4号(2005・2006年度)

- 奄美大島におけるサトウキビ農業の地域的基盤——奄美市笠利町節田地区を事例に——(大泉純平・鶴見朋宏・鶴田和也・松下勇登)第9章1節

このプレビューでは表示されないページがあります。

あとがき

私が奄美大島を初めて訪れたのは、2001年10月、日本工業大学の竹内淳彦先生(当時)、神奈川大学の八久保厚志先生(故人)との共同調査でのことだった。それまでも私は国内の離島をあちこち歩き、学生の地域調査実習を新潟県粟島、伊豆諸島八丈島で実施してきたが、本業は工業地理学だと自覚していた。奄美大島の共同調査も、大島紬をテーマとする予定であった。

しかし、実際に奄美大島を観察していると、1つのテーマだけを調査して終わりにするのがとても惜しくなった。奄美大島の景観や社会・文化のあり方は魅力的で、あれも面白そう、これも調べてみたい、そうした欲求が湧いてきた。シマのなかにたたずむトネヤやアシャゲ、サンゴ垣とフクギの防風林は、これまで意識して見たことのない景観要素であったし、豊年祭の相撲や八月踊りの活気に心は浮き立った。そして美しいサンゴ礁とヘゴが繁茂する中生代さながらの原生林、たわわに実る島バナナや一面に広がるサトウキビ畑にも強く惹きつけられた。

本土ではなかなか観察できないこうした事象を、学生とともにひとつひとつ解き明かしていく、というのはよい着想だったと思う。学生にとってもまたとない勉強の機会だし、私としても1人で調べるよりも効率的である。学生指導に手間がかかるかもしれないが、まあ、何回かやってみよう、と思いつつ、いつの間にか10回を数えてしまった。

「定点観測」のようにフィールドを固定する手法は、田林明先生(筑波大学名誉教授)が富山県の黒部川扇状地で採用されていた。学部学生の頃から先生に師事していた私は、自分もそうしたフィールドを持ちたいものだと、心のどこかで思っていたのかもしれない。そして合宿形式のインテンシブな調査実習という方式は、これまた私が大学院生の時に経験したものである。もっとも、当時の実習はとても厳しく、つらい思い出の方が多いのだが、奄美調査の参加学生はどう思っただろうか？

最初の実習を終えた2002年7月、調査の興奮が冷めやらぬ私は、夏休みの

このプレビューでは表示されないページがあります。

● 編著者紹介

須山 聡 (SUYAMA Satoshi)

1964年富山県富山市生まれ、筑波大学大学院 地球科学研究科 単位取得退学、駒澤大学文学部地理学科教授、博士(理学)、
専門分野は人文地理学・景観論・離島研究
主な著書：

『在来工業地域論』2004年、古今書院

『離島研究 I～IV』海青社(執筆分担)

Regional Characteristics of Amami-Oh-Shima:

From View Points of Undergraduate Students

奄美大島の地域性

大学生が見た島／シマの素顔

発行日 ————— 2014年 2月 28日 初版第1刷

定 価 ————— カバーに表示してあります

編 著 者 ————— 須 山 聡

発 行 者 ————— 宮 内 久



海青社
Kaiseisha Press

〒520-0112 大津市日吉台2丁目16-4
Tel. (077) 577-2677 Fax (077) 577-2688
<http://www.kaiseisha-press.ne.jp>
郵便振替 01090-1-17991

● Copyright © 2014 ● ISBN978-4-86099-299-6 C3025 ● Printed in JAPAN
● 乱丁落丁はお取り替えいたします

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。